

外国人 と生きる

日本に夢を託すマリ人

後藤 由佳 (ごとう ゆか)

愛媛女子短期大学専任講師

二人の留学生

今日、京都で生活をしていると、ずいぶん多くの外国人留学生を目にするようになった。JR東海道線の電車、京都市の地下鉄やバスの通勤通学時でも韓国語や中国語、英語を耳にする。それと同時に、アフリカからの留学生も全国で増えている。京都でもっとも多くの留学生が在籍する京都大学には今、エジプト、ケニア、スーダン、マリという一〇カ国からのアフリカ人が学んでいる。また、大分県別府市の立命館アジア太平洋大学では、ケニア、ガーナ、ウガンダ、マリという一四カ国のアフリカ人が学んでいる。

二〇〇六年四月、西アフリカのマリから来日した、京都大学大学院のサリフ・ジレさん。彼はマリで第一号の文部科学省一國費外国人留学生である。国立マリ大学に在学した後、ベルギーの大学院で学び、NGOで働いた経験もある。ジレさんはマリでの主要産業である農業、そのなかでもっとも多く、かつ輸出品目第二位の綿花に着目し、「マリにおける綿花産業の民営化過程における新しい市場競争的経済制度への小規模農民の適応」について研究をおこなっている。親戚もない状態からの始まりだったが、国費の奨学金をえているため、経済的には恵まれており、日本でのアルバイト経験はない。三月までの一年間は、外国人留学生および外国人研究者の宿泊施設の寮で生活を送る。

一方、二〇〇〇年四月に来日し、この秋、私立の立命館アジア太平洋大学大学院を修了したサリフ・サコさん。彼の場合は日本の親戚を頼っての留学であった。私費留学のため六年八カ月間アルバイトや奨学

金で生活を支え、勉学にとり組んだ。国立マリ大学を卒業後、日本の大学と大学院で学んできた。大学院では西アフリカと日本の関係について、開発経済学の視点から調査や研究を進めた。また、当時国際学生へのサポートが十分でなかった大学寮ではレジデント・アシスタントになり、階と棟の両方のリーダーを務め、大学院修了までの六年間は寮で生活を送ってきた。正課外活動の面では、地域のひととのふれ合い交流や、地域の活性化と国際化を促進する交流事業に積極的に参加し、アフリカ人の視点でアフリカ文化の普及にも力を入れてきた。来日以来、熱心に勉学にとり組み、特に日本語習得に積極的に励んだサコさんは、今では日本人顔負けの日本語能力を身につけている。

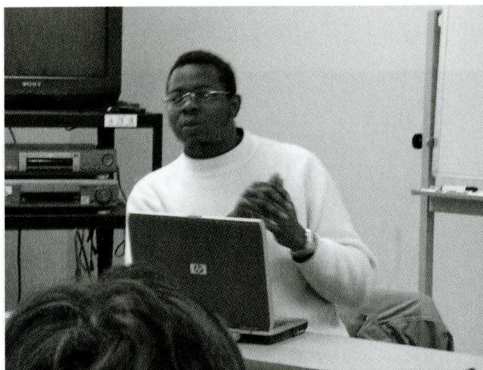
マリ人同士の固い絆

二〇〇四年は、日本には一万三一九人のアフリカ出身者が住んでおり、そのうちマリ人は一〇六人である。すでに生活の根を日本社会に下ろし、日本の大学卒業後は学業やビジネスで活躍しているマリ人も少なくない。日本名をもち日本国籍を取得した人もいる。グローバル化のなかで本国や故郷との結びつきを保てる安心感が、長期の滞在を支えてきた面もあるのだろう。

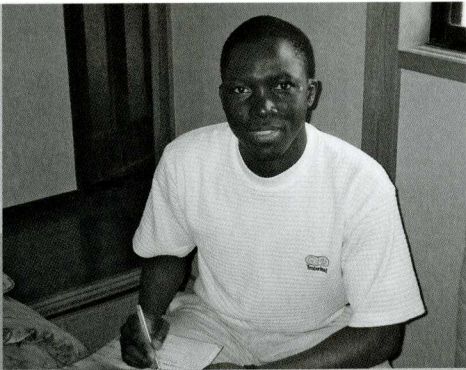
彼らは慣れない生活習慣や行動様式、ことばからくる不自由さや情報不足を補い合うため、また限られた余暇を仲間同士で過ごすため、週末には仲間の自宅やマリ料理のレストランを中心に集う。このようなパーティーが異郷での同国人同士の親交の場となり、マリ人の心の大きな支えとなっている。京都においても、少しずつ育ち

つつある小さなマリ人コミュニティが、日本でも暮らすマリ人を支えてきた。京都に来てまだ八カ月のジレさんにとつて、より研究を深めるうえで、アフリカでもヨーロッパでもないアジア、なかでも古くからの伝統を受け継ぐ町、京都で色々な体験をすることは大きな意味をもっている。来日当初は、習慣やことばがまったく異なる日本で何もわからなかったため、自宅の夕食などに日本人の知人を誘っても断られて、一人で食べる食事に孤独感を味わうことも度々あった。しかし今ではマリ人の仲間のおかげで少しずつ人間関係も広がり、大学や近所に友人ができてきた。また大学での授業は外国人を対象とした日本語クラスが中心となっているため、クラス内で外国人同士の仲間ができて、留学生活において困ったことがあっても、その仲間相談に乗ってもらえてきた。

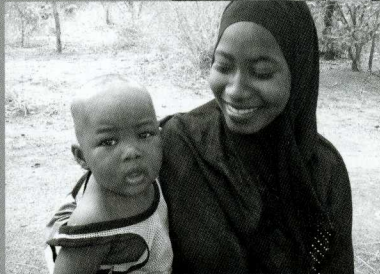
サコさんは、各国の文化が学べる所で大学生生活を送りたいと願い、親戚のいる日本での留学を希望した。彼は来日前、日本人は頭が良いと思ってたという。しかし、日本の若者に接してみても何を考えているのか、また服装や髪型を見ても、何の目的であるのかわからない。また、留学生を一人の人間としてではなく、外国人としてしか接してしまえないことが多いようにも感じるといふ。例えば、日本語で尋ねているのにもかかわらず、日本人は慣れない英語で返答することがある。むしろ留学生にも日本人と同じように接してもらえれば、「コミュニケーションが上手にいくと思う」といふ。さらにはこんな体験もあった。サコさんがスーパーマーケットで買い物をしていると、この人は何をかうのかと思うのか、子どもや



マリの文化講演をおこなうサコさん

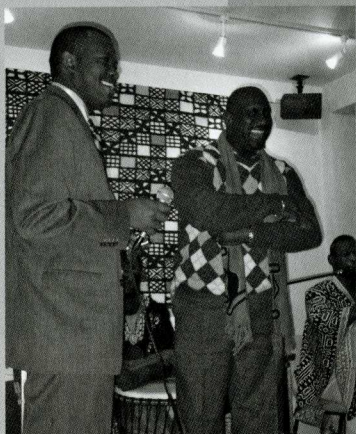


仲間の自宅できつろぐジレさん



ジレさんの妻と息子

パーティーに集うマリ人



マリ料理のレストランでおこなわれたアフリカの文化講演



マリ人のミュージシャンによるコンサート

経験を生かして

年中暖かいマリ出身のジレさんにとつて、京都の気候は寒すぎて決して生活しやすくないが、それでも人はまじめで親切でおとなしいと感じ、京都はお気に入りの町である。ジレさんは「日本の良いところは日本人には将来があるということだ」と言っている。今、ジレさんが何より願っていることは、マリにいる妻や息子と京都で一緒に留学生生活を送ることである。そして、大学院修了後は帰国して、日本で学んだことを生かしアフリカに役立てたいと願う。

一方、アルバイトなどの社会経験を積みだサコさんは、将来は会社をおこし日本を拠点にアフリカとの橋渡し役として活躍ができればと意気込んでいる。日本人にはもっとアフリカについて知ってもらいたい。またアフリカ人にも日本についてもっと知ってもらいたいと願っている。